特別寄稿

押川方義墓畔の人々を語る

（その6）

花輪庄三郎

橋本只子

押川方義の生みの母

「押川方義之墓」の前を東南に約50歩ほど下って、松の疎林の端にひっそりと数個の墓がある。すなわち、押川方義の生母橋本只子、同実兄橋本経光、及びその子息重経・経宣の墓である。

只子の墓は、標石・台石ともに良質の三影石、表面に「橋本只子之墓」、側面に「伊豫国松山藩橋本宅次藤原昌之妻」「明治二十七年一月五日就眠、享年七十有一」と二行に記るされている。

橋本只子

「東北文学」第3号（明治27年2月発行）に、只子葬儀の際朗読された只子の略歴（同郷の人、当時宮城女学校幹事佐伯陽一朗読）及びその弔辞（押川門下第一の高弟川合信水朗読）等から、その生涯のあらましが窺える。

橋本只子の墓

「君、本姓は中村、文政四年十一月八日を以て伊豫松山に生る。十七才の時、松山藩大納戸役橋本宅次（諱、昌之）に嫁ぐ。四十一才にして昌之君卒し、次男経光、その後を継ぐ。時に経光君僅に十七才。君家事を担任し、三男一女を教育し、倦怠あることなし。明治五年始めて押川方義君より基督教を聴き、同十四年伊豫国今治に於て横井時雄君より受洗す。同二十年八月経光君と共に仙台に移り、二十四年七月松山に帰り、二十五年再び仙台に来り、二十六年三月心臓弁膜症に罹り二十七年一月五日遂に卒す。享年七十有三。」とある。つづいて「四男三女あり、長男某夭折し、次男経光橋本家を嗣ぐ。三男方義出でて押川氏を嗣ぎ、四男順、広島鎮台に在りて明治二十五年病歿す。長女某夭折、次女某松山市芝山守約に嫁ぐ、三女某亦夭折す。

君、性行淑均確実にして実践躬行を重んじ、其の児孫に対する終歳一日の如く、公平にして敢て私あることとなし。其家を理むる約を守るを主とし、勤勉怠りなく以て家計を助く。其の良人に事うる一に貞節を主とし、常にその役の半は之を助く。其の征長の役、京師の戦に従うや、能く家政を整え、敢て内顧の憂なからしむ。」と、これによって方義兄弟の一般、及び方義の実父昌之が、幕末の京師動乱の際の活躍等も知ることができる。また同葬儀の際、川合信水朗読の弔辞の中に、只子の信仰生活をあげている。

「……明治四年、押川先生の洗礼を受くるや、君、挙家挙族とともに深く之を痛む。君殊に甚し。道理を以て、血涙を以て屡々先生に諭し、以てその信仰を止めんとす。先生、至孝、為めに心砕くるが如く、誠意熱涛の後、謹てその前に跪き、堅く自ら決する所を陳ぶ。曰く「此教を棄つるは神に対して宥さるべからざる罪を犯すなり。」と。君之を聴くや翻然として曰く「然る乎、基督の教を棄るは大罪なりや。」と。君心に以為らく「我が神仏を信ずること我が子の基督を信ずるに及ばず、基督教果して如何なる力を有するものぞ。」と。爰に研究の志を起す。明治十四年自ら決して洗礼を受け、迫害の中に孤立すること三年、毀るものに答えて曰く「人の如何に之を毀るとも、是れ「熊」の信ずる所なり。自らは「熊」の信ずる所を信ずるなり。」と（注「熊」は方義の幼名である）。

この只子の葬儀は、明治27年1月7日、仙台日本基督教会（東二番丁）において行なわれた。

橋本経光

押川方義の実兄

橋本経光

前記「橋本只子之墓」と相並んで「橋本経光之墓」がある。この二基は、石材、様式からその寸法まで一致しているが、石面のさびの程度、刻んだ文字の筆致の差などから見て、どうも同時の建立とは思われない。なお、「橋本経光之墓」の傍らに「橋本重経」及び「橋本経宣墓」の二つの小さな墓があるが、ともに若くてなくなった息子たちの墓である。

橋本経光の墓

橋本経光は、弘化4年伊豫国松山城下に、橋本宅次の二男として生れたことは前記の通りである。はじめ軍人に志し、また後に官吏となって身を立てようとしたが、ともに病弱のため中途挫折した。明治20年、41才の時、母只子とともに実弟押川方義を頼り、仙台に移り住んだ。今の清水小路、「東北専売局」の向側の辺に、方義の屋敷と隣り合って定住したのであった。

はじめ、リフォームド・ミッション事務所に勤めたが、24年、丁度、学院神学部に「邦語神学科」が開設されたので、これに発奮して同科に入学した。45才の老書生であったわけになる。27年に同科第一回卒業生として世に出で、31年按手礼をうけ教師の資格を得、伝道活動に入る準備を整えた。時に52才という晩学の篤学篤信の人であった。

その生涯は、主としてミッション事務所において庶務会計を輔佐された所に一貫した重点があったが、その傍ら国分町講義所・白石教会・北鍛冶町講義所等の伝道を担当され、その他、随時、仙台周辺の地方伝道にも尽力され、中でも34年に東二番丁に完成した「仙台日本基督教会」の会堂建設の際、シュネーダー氏を援けて尽力した功績は大なるものがあった。

しかるに、41年頃から胸部を患らい、毎年冬期間は相州茅ケ崎に避寒し、専ら療養に怠らなかったが、43年7月12日茅ケ崎南湖院において永眠された。行年64才であった。

宮本六兵衛

「東北学院」の建設に尽した「仙台基督教会」の長老

宮本六兵衛は、もと、福島県信夫郡福島上町、平民堤太平の二男として生れたが、後、宮本ひさ子と結婚、宮本家の養嗣子となってその実系をついだ。

宮本六兵衛が、基督教に入信するについては、次ぎのように伝えられている。その頃、宮本は仙台市表小路に社屋をもつ「奥羽新聞社」に勤めていた。表小路とは今の仙台市役所前の通りである。

宮本　六兵衛

またその頃、押川方義は東北伝道がようやく緒につき、伝道の本拠を市の中央の国分町にかまえて、明治14年にはすでに「仙台基督教会」を創設して、周辺の伝道に狂奔していた。

表小路と国分町とでは、すぐ目と鼻の距離にある。お互い朝夕出入の際にも、顔を合せる機会も多かったことでもあろう。また、当時の伝道者といい、新聞人といい、何れも時代の先端を担う職業人である。そうした関係から、お互いの職業意識が先きにたって、いつの間にか往来がはじまり、それが頻繁になるにつれ、宮本は次第に基督教に心を傾け出し、遂に押川説法の前に折伏されたといういきさつのようである。宮本は、根が篤実な性格であったので、その理解の度もはやかったと思われる。押川方義から受洗して、「仙台教会」の信者となったのは、明治18年6月で、宮本六兵衛は壮年まさに48才であった。

ところで、この明治18年という時機は、押川東北伝道の上で、極めて重要な時期を画した年であった。というのは、ここを基点として従来の教会中心の伝道から、更にその幅を倍加して教育伝道に事業を拡げていった年でもある。すなわち、18年に従来の無教派主義から一転して「日本基督一致教会」に合同したのがこの年であり、宣教師ホーイを迎えたのもこの年である。かくて翌19年、ホーイとともに「仙台神学校」をおこし、翌20年には、東二番丁東本願寺跡の広大な敷地を購入して、教会堂と神学校々舎建設の基盤をつくり、24年に至り、壮麗な神学校の本校舎が完成し、同時に「仙台神学校」を改組して「東北学院」の新陣容が完成されたのである。

要するに、この間のはげしい躍動は、東北学院が、仙台日本基督教会を母胎として生れ出る際の陣痛のなやみであり、また大きな喜びであったといえる。

宮本六兵衛の墓

この数年間はミッションスクールとして維持管理の面では教会と学校とは同一体の関係にあったので、当時有力な教会長老の役にいた宮本六兵衛の力に負うところが多かったのであろうが、中でも、東二番丁東本願寺別院跡を購入及び神学校敷地分譲に際しては、長老宮本の力に負うところが、極めて多かったと伝えられる。

23年、日本一致基督教会が、日本基督教会と改称した際、その信仰信条も改まり、教会と学校とを区別することになったので、25年学院では「東北学院理事局」を設定し、管理面では教会から独立した。しかし、ともに同じ使命のもとに建てられた両者は、その後といえども親密な関係を保って来たことは周知の通りである。

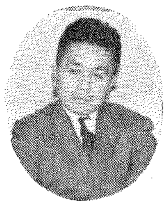
昭和3年、「押川方義之墓」の建碑式の式辞の中で、時の東北学院院長シュネーダーが、押川方義の事業を援けた功労者として、宮本六兵衛の名を挙げていることによって、その篤実な人柄と敬虔な信仰のほどがしのばれる。

なお、宮本六兵衛は40年12月、満70才で永眠したのであるが、その息子政之助も同教会の長老として篤信の生涯を一貫した。今は、孫の武之助は東京女子大学の学長・同信之助は同大学教授宗教主任・同敏彦は東北学院大学工学部教授の重要な立ち場にあり、それぞれの教会で長老をつとめている。まことに「積善の家に余慶あり。」というべきである。

（この稿、完）

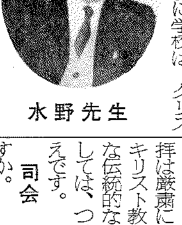
中高校のクリスマスの思い出

司会　日本では「もういくつ寝るとお正月」というような歌がありますが、それと全く同じような感じでやっているように思われますね。ところで田口先生がおいでになりましたので、田口先生、中学を学院で過されたようですが、その頃の何か思い出がございませんか。


田口先生

田口　当時の東北学院は、学生・生徒の数が少なく、神学部から私達の中学部の生徒まで現在の大学の礼拝堂に集って、全学の礼拝をもったように思います。思い出といっても、まだやんちゃな時代ですから蛸屋の大福餅を貰って喜んで帰ったことぐらいですかね。あの時代は全学でやれるというような恵まれた時代でした。私の方の中学校では、戦後何年位続いたでしょうか。クリスマスになると各クラスごとにクリスマスツリーを飾って、祝会を兼ねたクリスマスの集りを開いておりましたが、これなど残しておきたかったですね。組主任の先生は勿論のこと、授業でお世話になっている先生方も招待されました。丁度、学年末で忙しい仕事に追われている先生方でしたが、どうぞ我々のクラスに来て下さいと言われてあるクラスへ行くと、そこだけではすまなくなり、つぎつぎと、あちらのクラス、こちらのクラスというように、ごく短い時間ですが、みな訪問するようになったものです。その頃は、今考えたら粗末なお菓子でしたが、袋入りのお菓子をクラスで用意してあって、それを頂戴しながら、あるクラスでは歌を唄い、若い宣教師の先生方が教えた英語の歌を唄ったり、或は劇をしたり、紙芝居をしたり、楽しいひとときを送ったのです。あれは、やはりあの頃の学院の中学生には他の学校にはない素晴しい思い出になっているのではないかと思います。現在は、クリスマスの行事が、あちらにも、こちらにもあふれてしまって、今の生徒にあれを期待してもなかなかむずかしいかも知れません。

水野　各クラス毎にクリスマスの集りをすることは、昭和32年か33年頃まで続いたんでしょうか。最近のように学校は、クリスマスというものを厳粛にやろうということになって、以前とはちょっと別な方向をとって現在に至っているわけです。


水野先生

最近では、クリスマスではないけれども三年生になると、クリスマスみたいな集りをして、クラスでお菓子を食べるくらいなことはやるのですが、卒業生が多いので各クラスがやるということはちょっとなくなりました。

田口　つけ加えますけれども、榴ケ岡校舎ができて、私がそちらの方も担当しましたが、新らしいものをどう生み出してゆくか——それだけの期待と喜びがあったのですが——非常に苦心しました。榴ケ岡校舎の宗教主任は出村先生で聖書全体を受持って下さいましたね。今考えますと、何んにもないところから出発して基督教青年会を発足させたのです。クリスマスの時には、多分、先生は自宅に青年会の何人かを招待して下さって、そこで祝会を開いたのですが、非常によかったし、第一回生にとっては感激であったと思います。

出村　でもあの頃の学生は、本当によく覚えています。あのあと何千人も教えているはずですけれども、あの最初の135人というのは本当に不思議に覚えているんですね。やはり数が多いということは、どうしても手がまわらなくなるということは本当ですね。

これからのクリスマスを考えて

司会　ところで、いろいろお話しをうかがいまして、学校のクリスマスというのは建学の精神にのっとって学校がやることではございましょうけれども、出来るだけ多くの学生達並びに同窓生諸君がこれに参加して頂くということが最も望ましいことと思うんです。そろそろ時間になりますが、今後のクリスマスのもって行き方について何か、ご意見がありましたらお聴かせ願いたいのですが、院長先生、同時に学長としてもどうぞお願いします。

院長　あまり超越的なことでもいけないし、厳粛で、かつ一般的にするために、どういうふうにしていったらいいかと考えているのですが、私の素人的な考えでは、今のような小さい礼拝堂ではなしに、全員が一堂に会した礼拝が出来たら非常によいと思うのです。分散する日常の礼拝では、全体でよろこびあうという機会がないような感じがするのです。それは私の希望だけれども、やはり礼拝は厳粛にやることとして、今のキリスト教国における、あのような伝統的なものをこれから我々としては、つくっていこうという考えです。

司会　二関校長先生いかがですか。

二関　中高におけるクリスマスは、私にとっては去年初めての経験で、今年は第二回目ということになりますけれども、小さい、年若い生徒たちですから、やはり、クリスマスに楽しみを与えるということが大切だと思います。今のところでは先ず、厳粛なクリスマスをやっているわけです。しかし大学の方でやっているようなメサイヤですね、ああいうような立派な音楽をあそこで聞かせることが出来るならば、どんなにいいだろうかと思います。

水野　私の方の音楽部でもメサイヤをやってはいるんですが、規模も小さいし、本当に総合のものを聞かせたらいいですね。

二関　千八百人の生徒達に聞かせたら本当に素晴しいじゃないでしょうか。

司会　メサイヤの演奏にオーケストラを加えてほしいという要望もございます。

水野　それともう一つは、クリスマスは嬉しい、楽しいという感情を小さな中学生に与えられるようにしたいと考えるのです。

司会　ほかに何かひとことでも頂けませんか。

稲垣　以前に仙台市内の教会が連合して「市民クリスマス」というものをやっていたのですが、何時の間にか中断したままになっています。しかし東北学院同窓会主催の「公開クリスマス」は、説教とメサイヤの演奏で、ずうっと開いてきており、多くの市民の知るところとなりました。これは是非続けてゆくべきだと思います。そのために、子供達だけにでも何か小さなプレゼントをあげられれば、家族全員で出席することが多くなるのではないでしょうか。

小笠原　そうですね。

伊藤　昔は小さいカードを一枚貰ったものですが、やはりいつまでも思い出がありますね。

稲垣　子供は、そういうものを貰えば家に持ち帰って大事にするものですね。

小笠原　聖書にあるように、クリスマスの晩に、ヨセフとマリアが自分の生れ故郷に帰って来たというようなことがあるのですが、そのようにクリスマスというのはみんなこの故郷に帰る日だと思います。ですから全部がただ一つのふるさとに帰って来る、この学院の学生・教職員・同窓生が全部ここに帰ってくる、そして学院だけでなくて、仙台市民も、この故郷に帰って来る、更に全人類もまた故郷に帰ってくる。この東北学院のクリスマスは、全人類的奥行をもっていると言えるでしょう。

司会　どうもありがとうございました。